

仲良し三人娘「北野八軒」を語る

梶原 トヨ子 昭和一七（一九四二）年生まれ 北野在住

尾崎 節子 昭和一九（一九四四）年生まれ 北野在住

藤宮 はつ子 昭和二三（一九四八）年生まれ 北野在住

「農民一揆が来なかった」

梶原 北野は昔、八軒しかなかった。ほんと田舎だったんですよ。

尾崎 あまりに山の中で「農民一揆（慶応二〇一八六六〇年武州一揆）が来なかった」ってよく聞きましたよ。大和田や野火止地区の川越街道沿いには屋敷が多かったのだけど、富大臣（とみだいじん）と呼ばれた新井正敏さんの家に一揆の斧の跡があるというので、小学校の社会科

の時間に見に行ったことがあるんです。

それに比べて北野は、周りじゅう林で灯りひとつ見えない、だから一揆が来なかった、ということなのよね。

平成三（一九九一）年だったか、母のところ「ランプの話を聞かせてください」と、東北小学校の子どもたちが来たの。その時のテーブルが残っています。母が子どもの頃、だれかが野火止用水からの子備井戸に水くみに行つて、落ちたんですって。それでランプを持って行かれ

て真っ暗になってしまったから、あまりの怖さに姉妹三人でワアーワアー泣いたそうです。

ランプを掃除するのは、ホヤの中に手が入る子どもの仕事だった、なんていう話もしてますよ。尾崎には一台しかなかったけど、祖母の実家の高橋は大きい家なので二、三台はあったかもしれない。電気が遅れた地域でもあるんですね。

藤宮 うちのおばあさんの話がまた面白い。酒買って来いと言われたので出かけ

ると、狐が提灯持つてずっと付いて来る。帰りも送ってくれたので、「ご苦労さん」と言ったらピヨーンと跳んで行った、なんて言ってたね。

尾崎 私たちはそんなことを聞いているから、夜お使いに行くのが怖くて怖くて。右がお墓で左には雑木林でしょ。往きはまだいいけど、帰りにまたお墓の前を通るのかと思うだけで、そりゃあ怖かった。

「北野八軒」の暮らし

尾崎 北野八軒は上（かみ）と下（しも）に分かれています。うちは分家だから八軒には入ってません。本家の尾崎、藤宮、高橋、梶原さんの実家の高橋が上組、山本、藤宮、藤宮（今は小野寺）、山本が下組です。

梶原 水のことになるけど、北野で井戸があったのは高橋と尾崎家だけだったよね。

尾崎 うちには野火止用水の水を飲んでた。濾過なんかしてなかったな。畑に流れる直前、予備井戸として大きな池に水を引いていた。鯉を放して、それが死んだら

水が悪くなっている証拠で、その時は「井戸さらい」といって、全部さらい出して水を換えた。

子どもがいなくなったりすると大変。池に落ちたんじゃないかって、竹竿で掻き出すから、せつかく澄んでいた水がドロドロになってね。大人が必死で探す姿を面白がって、わざと隠れた子どももいたりして。

梶原 「人さらい」という話もよくあった時代だよ。

藤宮 二月の「初午（はつうま）」では、講の代参する「宿」をくじ引きで決める行事があったね。まとめ役は高橋家だけれど、宿は二軒ずつ担当してたね。

尾崎 稲荷講、御嶽（みたけ）講、榛名講、大山講、平方（ひらかた）講の五つあって。

藤宮 講ごとに出かける月が決まっています。

尾崎 今は、講に入っているのは二二軒くらいかしら。

藤宮 初午の時は楽しかったねえ。前の晩に、子どもたちが薪とお米をもらいに

歩き回った。男の子がリヤカーを引いて幟（のぼり）を立てて。

尾崎 お稲荷さんの境内で、初午の宿の人が薪を燃やしてね。お握りを作ってくれて、おしんこももらって食べたね。真っ白いご飯なんか普段食べられないから、男の子たちは「いくつ食べた」なんて自慢してたよ。

多かった子どもの死亡

梶原 それと、北野には「女人講の石碑」があるけど。

尾崎 観音様ね。私が聞いたのは、疫病か流行（はやり）病があつて、子どもがどんどん亡くなったので、その除災のために女の人たちが建てた（文政一〇〜一八二七〜年建立）ということ。実際、うちのお墓を見ると、初代の子どもが五人、その次には二人と、たくさん亡くなっている。

藤宮 うちもいっぱい亡くなっている。それでもらいつ子した。母の一番上のお姉さんは、もらいつ子して何人か育てたのよ。

尾崎 尾崎では昔、捨て子をしたって。

「辻に何時何分に捨てるから拾ってくれ」
って前もって人に頼んでスノコに乗せて
捨てる。それまで何人も死んでるので、
やっぱり除災の意味合いなんでしょうね。
四谷の石屋さんとは、拾い親としてしば
らく付き合いがあった。その人に育てて
もらったのが、うちのおじいさん。

おじいさんは、兵隊で一番上の甲種合
格で入隊したけど、銃剣で突かれて胸を
悪くしてしまった。作物作りが上手だっ
たけど三八歳で早死にしちゃった。

梶原 あ、こんなこともあったね。新座
志木中央病院近くの家が選挙の投票所に
なっていた時の「火箸（ひばし）事件」。
尾崎 投票箱の口から用紙が落ちないか
ら、火鉢の火箸で突いたら、燃えてしま
ったという、あれね。

梶原 昔は、個人の家が選挙の投票所に
なったりしていたのよね。

子どもの頃の遊び

藤宮 私はご飯の支度はしたことがなか
ったけれど、九つ違いの妹をおんぶして、

遊びながらお風呂を焚いてた。薪でね。

農家では家の半分ぐらいを土間が占めて
いて、うちは木の風呂が土間にありまし
た。焚き口（たきぐち）は中だった。

尾崎 はっちゃんちの風呂は玄関の横だ
ったね。

藤宮 だから夏になると外からすぐ入れ
るようになっていたんだよね。野良着の
まま井戸から水を運んで、薪をくべて。
うちはわきに竈（かまど）があったけど、
それぞれ家によって違ったかな。

梶原 焚き付けるのは子どもの役目で、
遊びながらだから、すぐ消えたりするの
ね。

尾崎 火のつくまでが結構大変。経木（き
ようぎ）のような薄っぺらな紙に、硫黄
（いおう）が付いている「付け木」で火を
付ける。

梶原 マツチのようなものね。

尾崎 家の屋根に西陽がかかったら風呂
を焚く、というのが手伝いの約束。風呂
が沸いてないと怒られる。でも少しでも
長く遊びたいので、遠く離れた屋根を指
して、「あそこに陽が射した時ちゃんと始

めたよ」って悪知恵を働かせたりもして
いた。

藤宮 あとは、よくある遊び。かくれん
ぼ、おにごっこ、おしくらまんじゅう、
石蹴り。遊び道具は何もなくてね。

尾崎 何もないから、土間にその辺の棒
で丸や何かを描いたりして。

梶原 男の子ともペーゴマや竹馬をした
り。近所のみんなで遊んだね。

尾崎 あと、お稲荷さんの境内では、み
んなで集まって夏休みの宿題会もあつた
ね。先生が見に来てくれたり、年上の子
が勉強をみたりして。次の春入学する子
を親が連れて来て、なじませることもあ
つたよね。

悪いことすればどこの子も関係なしに
怒られて。そうそう、私の一番の楽しみ
はブドウジュースを分けてもらうこと。
ブドウは買えるけど、ジュースなんて、
その時代ないでしょ？ ジュースを買っ
て来いと言われると嬉しくて嬉しくて、
一升瓶を持って行った。

ある日、飲んでいいよ、と言われたの
で飲んだら、梅酢だったのよ。瓶が並ん

でいて、同じような色だから間違えちゃったの。あの時の酸っぱさは一生忘れられない。小学校一年頃ね。ぶどう園はあの頃、北野きりなかった。

梶原 私は結婚して外に出たので、高校までのことくらいしかわからないけど、今の立教学院の敷地いっぱいがぶどう園だったよね。

ルーツは寛永から

藤宮 系譜的にはうちが一番古いんです。寛永からの家系図があるからわかります。昔、葉屋をしていて、屋号が「神明丸（しんめいがん）」と言ったんですね。正月に掛ける掛け軸が家に伝わっていて、絵画が三本と書が三本あるんだけど、絵が非常にきれいな。あちこち行って戻ってきたらしいのね。

尾崎 尾崎は志木から出ています。お寺さんは志木の真言宗「寶幢（ほうどう）寺」。藤宮も高橋も同じだよ。小学校の時、尾崎という校長先生が二人いて、太った校長と細っこい校長。細い方の校長先生が、話を聞きたい者は集まって、と

いうので聞きに行ったのね。そしたら、尾崎のルーツは加賀国から来ていると言うんです。家紋が一緒で「丸に梅鉢」。戦国時代、志木の城を攻めた時に住み着いた新家だと言っていたの。大和田に加賀屋というのは確かにあるよね。志木の尾崎神社が家系のルーツらしいです。

とが一緒になったから、つまりお坊っちゃんとお嬢さんが一緒になったから、生活するのが大変で、みんな援助してもらったみたいね。

梶原 本家の墓を見ればそのあたりがわかるかもね。

尾崎 高橋の本家は、志木の駅までよそを踏まずに行けたよと、よく聞きました。慶応か安政生まれの伯父さんは、今の大和田小学校の神明神社のところにあった寺子屋まで、机をかついで勉強に行ったとか、一八歳まで奉公人とは「別釜」で食べていたとかいった話もよく聞いたよね。

藤宮 だからこのあたりは養子が多くて。うちは二代ともそう。

尾崎 あの時代で女学校出たのはみっちゃんだけと言われてたね。

梶原 「別釜」って、身分の違いを示す言葉ね。

藤宮 はい。末っ子の母みちは、文京区の伯母にもらわれていったのね。でも姉たちが嫁いでしまったあと、兄の死去で跡継ぎがいなくなっちゃった。それで母が戻ってきてお嬢さんをとった。結婚したのが二九歳。戦後です。父は傷痍軍人でした。

尾崎 そう。奉公人は麦とか混じっているのだけれど、それとは別の釜で真っ白いご飯を食べてた、ということだよ。そんな大所（おおどころ）の高橋出のおばあさんと名主の尾崎本家のおじいさん

尾崎 私の実父は私が生まれる前に戦死していたようなんです。私が五歳の時にそれがわかった。なんでわかったかとい

うと、一緒に出征した志木の人が帰還して事情を教えてくれた。ある日の戦闘で部隊は全滅。その人は腹痛で出られなかったから生き延びたらしい。

それまで、母たちはずっと、父は生きて帰ると信じていたようです。女だけの生活だったけど、おばあさんの実家の高橋の家に世話してもらって何とか持ちこたえたわ。継父が来たのが小学二年の春で、継父からは何でも一人前に扱われました。

進路、そして結婚

藤宮 私は、中学を出てから、サンケン電気に勤めながら夜間高校に通ったんです。サンケンの入社式は、体育館いっぱいでした。中卒の人もいれば、私と同じように夜間に通う人もいるし、大学生もいて、いろいろな人がいたわ。女性もたくさんいましたよ。サンケンは組合が強くて、賃上げストで有名で、ストの時なんかはにぎやかで楽しかったなあ。

学校は県立川越高校朝霞分校です。当時の定時制は、川越本校と、朝霞、入間

川、所沢の三分校があつて、文化祭や体育祭には川越の本校まで行きました。

朝霞分校は今の朝霞市役所の隣にあつて、昭和三八（一九六三）年から四二年まで四年通った。志木から朝霞まで東武東上線で行き、あとは歩き。自衛隊の入り口を通り越して、米軍基地の前でした。この頃は、駅の近くまで基地だったんです。

生徒は結構いましたよ。男子が女子の倍いました。帰りは、七時頃に父が駅まで迎えに来てくれたり、早い帰宅の時は男の子のバイクに乗せてもらったり。

尾崎 うちは、学校に行きたいと言ったら、農家を継ぐのをいやがるから行かせないと、母が認めなかったのね。履歴書を書きなさいと先生も勧めてくれたんだけど、文化服装学院の一年コースでさえもだめだった。外に出たら、そっちが良くなつて、逃げ出されるとでも思ったのでしょうね。周りからの助言もあったのだけれど、とにかく全部断つて、進学の許可を出してはくれなかった。

梶原 私は二一歳の時、梶原と結婚しま

した。見合いです。梶原は宮城県気仙沼出身で、一家して宮城県を引き払って来ていた。結婚生活は松戸で始まって、二〇年近く住みました。そのあと実家の土地をもらったので、こっちに移り住んでから二六年になります。

藤宮 私の結婚は二五歳ね。恋愛はいろいろあつたけど、みな長男ばかりで……。夫は宮城の人。大工をしていて、たまたまこっちに来ていたところ、知り合いだった夫の姉から紹介されたの。

尾崎 私は、おしつけ結婚、おしつけられ結婚かな。母の再婚後に生まれた妹もいるけど、私が跡をとりました。母は五人姉妹のうち二人が亡くなって、残った三人姉妹の一番上だったので、藤宮さんと同じでうちも二代続けて婿取りです。

農家を継ぐという話

尾崎 母は進路のことでもわかるように、とても厳しかったの。私は一〇月に結婚したのですけど、全部作付けを済ませて穫り入れから渡すのだから、「これだけの作物を上手に作れば、子どもぐらい自

分たちで育てられるはず。ここから始めなさい」と言われたんです。つまり、もらった時には収入から始まるのでホクホクしましたけど、翌夏になると売り物が何もなかった。今でこそいろいろ作ってるけど、あの頃は麦、米、ニンジンだけ。夏はヒイヒイしながら生活しました。

一番苦しかったのは子どもの学費を出す時ですね。麦、米だけじゃ子どもを育てられない。ダイコン、ホウレンソウ、カブなどを増やして。ダイコンなんかは、朝、日が出る前にとらないと洗っても真っ白に上がらない。日の出前に一仕事して、帰って来てご飯を食べる。それでもね、母がお勝手仕事をやってくれたから、なんとかできたのだとは思ってますよ。そういう思いをして、一生懸命子どもを育てました。

今の人はいいですよ。ね。「子ども手当て」なんていうもので政府が育ててくれるんだから。でもね、子どもは自分で育てるものでしょ？ お金をくれるよりも親の働く場所を作ってくれるほうがありがたいですよ。

農業はお日様次第なんです。機械が欲しかったけれど、お金を貯めたくても貯めようがなかった。田んぼに機械が入ったのはいつだったかしら。ずっと手作業だった。切り株を一つ一つ手で掘った。機械だったらバァーッとできるのにね。

そのうち、のちに新座市長になった高橋の喜之助伯父さんから教えてもらって、少しずつ返済できる、市役所の「近代化資金」というシステムを使えることがわかって、機械屋をしているところにトラクターを探してもらったりしました。

藤宮 うちは畑を立教学院の敷地としてほとんど売っちゃった。父が四〇歳過ぎでいて、畑仕事をするのも運転免許をとるのも大変だし、学校に勤めさせてくれるという話も出たのでそうしました。新座団地ができる時に田んぼも出したから、土地はせいぜい一反残ったくらいです。

「供出」で苦しかった時期も

尾崎 立教のことではこんなこともありましたよ。農地を買ってから建物が建つまで一年ぐらい間があったから、雑草が

生えてくるのね。草刈りしたら日当が出るというから、行こうとしたら、うちの仕事を放っておいて行くのかって怒鳴られた。

時代は前後するけど、子どもの頃、五百円の金がなく税金が払えないと両親が話していたのを思い出します。麦作っても米作ってもサツマイモを作っても全部供出の時代。うちの親は働くだけで事務的なことが苦手だし忙しいし。引き落とされると思った税金が落とされていなかったことがあって、差し押さえにあっちゃった。母は畑に出ていて、家にいるのは私だけ。役人がズカズカと上がってきて、目の前でたんすにも押入れにもベタバタと赤い紙を貼って行ったのね。

結局、この時も喜之助伯父さんが、農協で借りてはどうかと手続きをしてくれました。私はまだ子どもだったから訳もわからずにいたのだけれど、ベタバタ貼られた時の様子は鮮明に覚えています。そんなふうには生活は大変だったんですよ。今、うちは農業を継ぐ人はいません。子どもが職を選ぶ時、採算の合わない

い仕事ならやってもしょうがないと言われてしまいました。子どもの前で、農業は合わない合わない、と言い続けたからですかねえ。

志木駅に南口ができた頃

藤宮 昭和四〇（一九六五）年前後、この辺りはまだまだ暗かったですよね。志木駅の階段は狭いし、南口ができてからもまでは砂利道で。

尾崎 立教高校ができてから、南口ができたのよね。

藤宮 それまでは志木側だけなので、踏み切りを渡らなければホームに行けなかった。でも北口と南側をつなぐ循環バスが通っていてね。結構便利でしたよ。いつの間にかなくなったわね。

梶原 志木街道から武蔵小金井までバスが通っていました。ボンネットバスです。サンケンの前も通っていました。すごい砂利道だった。

藤宮 バスしか交通手段がなかったのよね。

尾崎 武蔵野線ができた頃（昭和四八へ

一九七三（年開業）、電車は一時間に二本だけ。昼なんかは一本きり。大宮から帰ってくるのに二時間もかかったわよ。なので、浦和に行くにも大宮に行くにも、みんなバスだった。

ある日、蕨まで行くのに千円札一枚しかなくて、志木からバスに乗ったら、「くずれないからそれじゃだめ、浦和に着いたらすぐ降りて」と言われただけで乗せてくれた。いい運転手さんだったなあ。

そんな時代だったのね。でもバスに乗ればいいほう。たいていは自転車でした。

小学校の五、六年にもなると、税金納めて来いと言われて学校に行く前に使いにやらされたのね。今の大和田小のわきあたりにあった大和田役場まで。

藤宮 郵便局のあったところかな。金井さんの奥ね。

尾崎 今の新座駅に通じる新しい道路のところ。そんな頃から、どこに行くにも自転車でしたよ。

藤宮 その頃は子ども用自転車なんかないので、大人の自転車の三角のところに足を入れてこいだよね。

母と婦人会の会服

尾崎 「女の人は出かけるところが無いから」と言って並木清子さんが婦人会をつくってくれましたよね。小柄な藤宮のおばあさんと、体の大きな尾崎のおばあさんはどこに行くにも一緒に、「弥次喜多道中だね」ってからかわれていました。六〇歳になったら、定年だから婦人会を辞めると言ってたけど、続けていたね。

モスグリーンの会服があつて、どこに行くにも着ていた。「子どもの卒業式にも着られるし、制服だと思つて全員これを着るようにすれば、下は何でもかまわないでしょ」と並木さんが言ってくれたおかげで、その都度洋服なんか作れない貧乏暮らしには、「すごく助かった」と母は感謝していました。

今はさすがに会服はないけど、私も定年の年齢を過ぎても入会し続けているんですよ。

（聞き取り 平成二三年三月）

恵まれた都市近郊の農家で

大竹 京子

昭和二三（一九四八）年生まれ
大和田在住

末っ子で甘やかされて

野火止の大きい農家で五人兄弟（女四人、男一人）の末っ子に生まれました。姉たちがいたせいもあり、家事手伝いはほとんどしなかつたですね。子ども時代はだっこちゃん、ミルク飲み人形、卓上ピアノ、フラフープなど新しいおもちゃをすぐ買ってもらっていました。

家の前を野火止水が通っていて、お釜や野菜を洗ったり、お風呂の水に使ったりしていました。お風呂には、二つのバケツで天秤棒を使って運ぶんです。井戸もありましたが、あんまり使うと水がなくなっちゃうのでそうしていたように

す。四年生のとき水道が引かれたんですが、お風呂はやはり用水を使っています。

学生生活を楽しむ

大和田小学校を卒業して、東京の私立の中学に行きました。今の文京学院大学の附属です。巣鴨と駒込の間、六義園の隣だったので、バス、東上線、山手線を乗り継いで通いました。東京の私立へ行く人は当時、男性でも少なかったですね。中学に入って、生活環境がガラッと変わりました。日比谷のみゆき座で映画鑑賞があつたんですが、現地集合と言われとも一人では行けなくて、親戚の家に泊

まり、送ってもらいました。このとき見た「サウンドオブミュージック」は今でもよく覚えています。学校の帰りに池袋で食事をしたり、このあたりでは考えられないことでしたね。

短大時代は、ソシアルダンスを明治大学のダンス部と組んでやっていました。練習、練習でお付き合いとかはなかつたんですが、一組だけ結婚まで発展した人たちがいましたね。他にはお茶、お花、マンドリンなどいろいろ楽しくやらせてもらいました。

スーパーや直売所に野菜を出荷

短大卒業後、野村證券に一年勤めて、

一年家において、二三歳で、ここ大和田に嫁いできました。農家なので畑仕事をやるのは当たり前、長男なので両親との同居は当たり前、という世代の最後の頃だったのかもしれない。ただ、お義母さんがとても気を遣ってくれて、よそのお嫁さんよりもずっと恵まれていました。

昭和四五（一九七〇）年に米の減反政策が始まったので、作っていたのは、ホウレンソウ、ニンジン、ゴボウ、ダイコンなどの野菜だけですね。できたものを築地や神田の市場に直接持ち込んでいました。その後、市場のほうから、スーパーマーケットに出荷できるいいものをたくさん集めてくれないか、という話があり、近隣の農家をお願いして数を集めて持って行くようになったんです。それが今の青果卸業の始まりですね。

私は事務関係が得意だったので、そっちのほうをやるようになりました。現在は、野菜と、うどん用の小麦を作って、粉にして市の農産物直売所に出しています。

地元の人と「新住民」

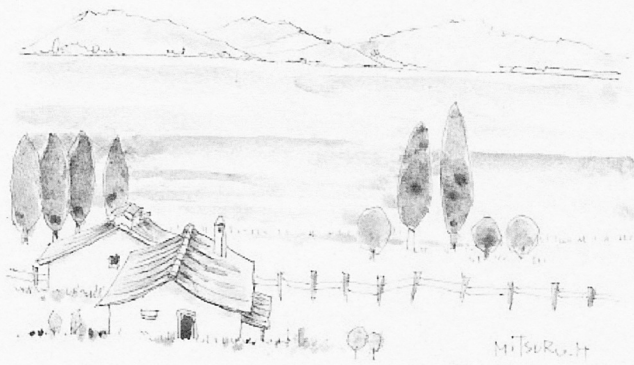
人口が急激に増えた昭和四〇年代、よそからきた人たちをすんなりと受け入れたわけではありませんでした。

地元の人たちで固まっちゃって、何かの会があっても、新しい人はなかなか入りにくい雰囲気をつくっていましたね。正直にいうと私も。

でも、婦人会も新しい人たちが積極的に入ってくれたおかげで大きくなってきたのではないかと今は思います。

現在は家の仕事と、民踊の指導、市のレクリエーション協会の役などをやらせてもらっています。

（聞き取り 平成二三年三月）



新たな農業に取り組む

尾崎 千恵子

昭和二五（一九五〇）年生まれ
本多在住

公務員から農業の道に

私は福岡県八女市で生まれ育ちました。学校を卒業後、郷里で農業にたずさわったり、生活改良普及員として福岡県に勤めたりするかたわら、よりよい農村、よりよい農業を志す若者たちのグループ「4Hクラブ」に入って、活動していました。

夫も同じく新座の「4Hクラブ」で活動しており、共通の友人から、新座市の農家を見に来ないかと誘われて。それが夫との出会いです。その時、「新座市」という市があることを初めて知りました。

新座市についての先入観はありませんでしたが、私の実家はミカン農家で、純然とした農家であり、こちらは野菜農家で都市近郊農家ですから、違いはあるだろうとの予想はつきました。

結婚については、知らない土地だし、それに彼は農家の長男で「結婚したら一緒に農業をやりたい」と言われ、すごく迷いました。生活改良普及員として公務員だったので、ここで辞めるのはもったいないとも思い、友人に相談しましたら「埼玉県でも試験を受け直してやれるのでは」と言われました。

しかし、尾崎家の農地は、家族全員で

農業をしなければならぬ面積だったので。夫と両親が農業をやって私が勤めるといった状況ではなく、結婚したら勤めを辞めて農業をするしかないと思ひました。

結局、夫の「農業を一緒にやっていきたい」との強い情熱に負けました。公務員をそのまま続けることで、私の人生を全うできるかな、と思っていたけれども、だれかと一緒に農業をやることによって、自分のやりたいことを遂げられるのではないか、との思いも半分あつて。結局こちらにかけたということでした。

昭和五〇（一九七五）年に新座に来ま

した。当時、新座市の専業農家は一七〇軒位ありましたが、今は五〇軒位になって、結婚した三〇年前とは随分違っています。

まず、私が最初にやろうと思ったことは、こちらの農業のリズムに慣れて、農業で一人前になることです。今までの勤めも、一人前として認められてお給料をいただいていたわけです。結婚して野菜作りを始めましたが、一人前に働いて「ちゃんとやれる」と認めてもらわないといけないと思いました。

子どもを保育園に預けて

子どもが三人できましたけど、働く女性にとつては、子どもをどうやって育てていくかが課題です。福岡で働いていたときには、先輩たちは子どもを保育園に預けていました。女性が働くというのはそういうことだろうな、と思っていましたので、農家で自分が一人前になるのは、子どもを保育園に預けて働くことだと考えました。

それで、最初の子どもができた時に、

保育園に預けたいと市役所に行ったのですが、「前例がないから」とか「みてくれるおじいちゃん、おばあちゃんがいるでしょ」「農家には農繁期と農閑期があって、暇なときだつてあるでしょ」という答えでした。

野菜農家は一年中仕事があるうえに、うちでは、おじいちゃんは長男が一歳のときに亡くなっていて、おばあちゃんは畑仕事をしなくてはなりません。まだ引退する齢でなく、孫にかかりきりになれる状態でもなかったのです。

すぐには入れませんでした、何度か市役所に交渉して、何とか入れました。農家で保育園に預けたのは、うちが初めてだと言われました。私の後には、農家で保育園に預ける人が増えてきました。だれかが突破口を開けば、次の人がやりやすいということですね。

この経験から、「一人前に働く」ということは皆の先に立ってこのように道を切り開いていくことだとも思いました。

私は、保育園に預けることで助かりましたが、他の農家では幼稚園に入れたり、

おじいちゃん、おばあちゃんがみたり、それぞれの家のやり方でやっています。

自分として生きたい

子どもが生まれて、私が農家の嫁としてそれなりの仕事をしていけば、一人前と認められるようになったかとは思いますが、義理の母親にしてみれば、あくまでも私は農家のお嫁さんですから。

でも、私は、その「いいお嫁さん」にはなりきれなかったと思います。私たちは上の年代には、「親に口答えしなくて、よく働く嫁さん」が「いいお嫁さん」というイメージがあつて、まだそういう時代でもあつたのでしょうか、私はそれに当てはまらなかったですね。

こんななかで、悶々とした時期がありました。自分が自分として生きたい」と心の中で思っていました。

家の中でギクシヤクすることがあると、「皆いいお嫁さんを演じなければいけないのかな」「外国のお嫁さんはどうしているのかな」と疑問を持っていました。

女性海外研修が契機に

子どもが小学生の時でした。埼玉県で女性の海外研修をやっているのを新聞で見て、「行ってみたい」と応募しました。

前年、夫がアメリカ研修に一〇日程行った時には、私は「行ってらっしゃい」と送り出しましたから、「今度は私が行く番ね」と。夫とは、五分五分と思っているから問題はなかったです。

でも、義母にしてみれば、「小学生の子どもを置いて家を一〇日も空けるというのはとんでもない」という考えがありますから、「子どもはどうするの」と言われました。

ちょうど私がいないうちに、農業大学の研修生が来ることもなっていて、おばあちゃんはその人たちの食事とかの面倒もみなければならないので、納得できなかつたみたいでした。それでも、子どもには「自分たちのことは自分たちでやってね」と言い聞かせて出かけた。

周囲の農家は、皆びっくりしたみたい。農家の人にしてみれば、家を空けること

が「農家の嫁らしくない」「嫁さんの身分で何事…」というのがあつて。私が行つたことで、その後は、農家の人も行きやすくなつたけれど、最初に行くと、どこかで何か言われるんですね。

一回ぶち当たってしまったえばいいのだけれど、上の年齢の人はまだそのへんがむずかしかつたんでしょね。

われら田舎のヒロインたち

海外研修では、ドイツやイギリスの農家でホームステイもしました。ここでは、「二人の個性をもった人間として生きなさい」と教えられて、「とらわれていた自分ってなんだろう、とらわれなくてもいいんだ」ということに気付かされました。

これがきっかけとなって、「われら田舎のヒロインたち」というネットワークに参加することになり、もう二〇年近く活動を続けています。

農業をやっていると、この地域しか見えないのですが、この会には全国から個性的な人がたくさん集まってきました。私みたいに、地域では「変わり者」と見られ

ていても、「自分らしく生きたい」と思っている人たちです。

だから、日頃思っていることを話し合えるし、各地で困っている人がいれば、どのような手助けができるか、みんなで考える場になっています。

女性が女性を持ち上げていく重要性を、実感しました。

結婚して農業を始めた頃、仲間が欲しかったので、出荷組合の同年代の人たちと呼びかけて「若菜会」を作りました。今も続いています。メンバーは七名で、収穫祭に赤飯をふかして売ったり、農協でのデイサービスにお昼の支度を頼まれば手伝ったりしています。

そのほか、自分たちで旅行したりして、農家のお嫁さんたちのいい息抜きの場になっています。お互いの悩みを相談しあったり、今何を作っているとか、日頃の仕事の情報交換もしています。

子どもに望んだこと

私は、いろんな職業の中の一つとして農業があるのだと考えていました。だか

ら、いろんな選択肢の中から息子が農業を選んでくれれば一番いいと思ったのです。周りが最初から「農家の長男だから農業を継ぎなさい」と言うのでなくて、息子が自分の意思として農業を選択してほしいと思っていました。

それで息子には、「農業はこんなに面白いんだよ」「楽しい農業のやり方もあるよ」「農業も選択の一つとしてあるよ」って言い方をしていました。そしたら、それを聞いていたおばあちゃんがすごく怒りましたね。

息子が生まれたとき、おじいちゃんが、尾崎家の跡継ぎが産まれたってすごく喜んでたんですって。その頃は、男の子を生むことが一つの勲章みたいなところがあって、「男の子が生まれて良かった」って言うのはどこの家でもありましたから。

おじいちゃんは息子が一歳の時に亡くなりましたが、「跡継ぎができたって、あんなに喜んでいたので、おじいちゃんが墓場の中で泣いて悲しむ」っておばあちゃんに言われて。私が子どもに「農業を継がなくてもいい」と言っているように

聞こえたのでしょね。

子どもには、もっと大きな意味で農業をとらえて欲しいと思っていたのですが、そのことを理解してもらえなかったようです。息子が運よく農家を継いでくれたから、おばあちゃんは、今はすごく喜んでいきます。

「家族経営協定」を結ぶ

農業にたずさわる女性の立場から考えられた制度に、「家族経営協定」があります。女性や若者が農業経営に参加できる協定で、わが家も息子の就農を機に協定を結びました。息子がただ単に農業を継ぐというのではなく、休みや給与などの決まりがあったほうがいいのではないかと考えたからです。

協定の内容は、息子は直売を担当、夫は市場出荷を、私は加工を担当することや、息子は日曜日、休日に月四回休む、給与は息子が経営者になっているので、月何万円を振り込んでもらう、などの取り決めです。このようなことをきちんと書いたものがあるというのは嬉しいこと

です。ただなんとなく働いて、というのではなく、自分の働きが認められることであり、息子も堂々と休めるのはよいことだと思います。

息子は子どもが小さいし、子どもに合わせて日曜日はちゃんと休みます。夫と私は、雨が降って仕事ができない日や、用事のあるときに休みます。「週一日休めていいな」と思う私たちと、「土曜日も休みたい」と思う息子と、家の中のせめぎ合いです。

いつまでも経営者として農業で働いてもらうことが、年寄りを大事にすることもあるという考え方もありますが、私は、若い人を一人前にするために早く全権を与えたほうがいいと思います。

勤め人は定年で線が引かれますが、農家の場合は定年というものがありません。「定年がないから、いつまでも働いていい」という考えと、「いつまでも全権を握っていることがいいのか」の両方のとらえ方がありますが、どちらがいいのか私にはわかりません。

農業には経験も大事ですが、去年こうだったけど今年はどうだとか、話し合う回数を多く持つことはいいいことだと思えます。わが家では、一人で勝手にやるのでなくて、話し合いを通じて経験を伝えたり、どうするかを決めたりしています。

女性起業家への道

女性が自分の名義で農家民宿や直売所を始めるとき、借金をしようにも担保がないなどで、資金面での壁にぶつかります。

でも、家族経営協定を結んでいると、起業に当たって、金融機関からお金を借りたり、県の融資が受けられやすいといったことがあります。私が加工場を作った際には、現金で作ったので借りませんでした。が、起業家として自立を目指す女性にとつてはとていい制度です。

女性の起業の場として、「道の駅」はすごいですね。新座駅前にもできるといので、少し勉強しなければと庄和町（現春日部市）を見てきました。売れると面白いし、農家も活気づくから、「もうちょ

っと加工面にも力を入れてやればいいな」と思いましたね。

でも、都市近郊農家はある意味で豊かで、農業をしなくても副収入があるから、「やらない?」「これからはいいよ」と仲間を誘ったら、「そこまでしなくても」と言われました。売れるのはわかっているけれど、だれがどのようにやるのが課題です。

今、加工はダイコンの漬物をやっていますし、観光イモ掘りにも子どもたちがたくさん来ています。私の農業へのこだわりは、平林寺の落ち葉の堆肥で野菜を作っていることです。私の自慢です。

新しい世代との共存

息子のお嫁さんは自分のやりたいことがあって、それは農業ではありません。私が農家に入った時とは、考え方が全く違っています。

息子は、結婚する時、「好きになつた人と結婚するのであって、農業やるかどうかで決めるのではない」と言いました。最初はアパートを借りて、彼女は勤めを

して、息子はそこから農業をしに家に通っていました。子どもが幼稚園に行くようになり、同じ敷地内に家を建てて住むようになりました。彼女は、勤めは辞めました。畑に行つて仕事をすることはありません。児童英語の資格を取つて子どもたちに英語を教えています。

そのような生き方を見て、私は「息子のお嫁さんは家のお嫁さんではない」と、改めて思いましたね。往々にして農家の人はそこを間違つて、「うちのお嫁さん」と言うし、私たちの年代でも「家のお嫁さんだから手伝つてくれて当たり前ですよ」と言います。

でも、家のお嫁さんじゃないから、私たちが「農業をやつて」とか言うのは：おかしいですよ。そうでないと、私が結婚したときに義理の母が私に思つていたこと、言つていたことをまた繰り返すことになつてしまう。

若い人たちのやりたいことと、私が今までやってきたこととは違います。次の世代を育てるといふのは、若い人たちがやりたいことを側面から応援することで

はないかと思っっています。私ができる応援は、「ママ友」たちが活動する場所を提供するとか、彼女たちが作った品物を買ってあげたりするとかです。

私が決める私の生き方

息子は、「お母さんはいいな、行きたいところに行って気楽でいいな」って言いますよ。でもね、あんまり縛られるのはよくないですね。自分の人生、自分で生きなくては、と思っっています。

今までいろいろなありました。だから若菜会が良かったんです。同じ立場の人が「そうだよね、そうだよね」って言いながら進んでくることができました。

福岡で4Hクラブの活動をしていた時にもアメリカに農業研修に行きました。そこでは、いつも「あなた何したいの」と聞かれていましたが、私は答えることができませんでした。それまでは、そういう教育をされていなかったし、人が指示してくれるのを待つ人だったから。だけど、研修から帰って来てからは、自分で決めていかなければいけないと思うよ

うになりました。

農家に入って自分のやりたいことを言っちゃうと嫌われてしまうし、要するに、いい嫁さんでいるには、「はいはい」と言ったくないと言わなかったのね。それで私もギクシヤクしていました。それを変えました。「どう思うか」「どうしたいか」を自分から言わないとだめだっというのを、県の「女性海外派遣」の研修や「われら田舎のヒロインたち」に出かけていくことで、改めて気づかされましたから。

私のやってきたことが、すべてうまくいったわけではないです。後になって自分の行動や言ったことが、みんなに理解されていなかったり、受け入れられていなかったと、わかることがありました。農村女性といっても一くくりにして考えられるものではないですね。いろいろな価値観があることを理解していかないですね。

これが私の今の生き方です。

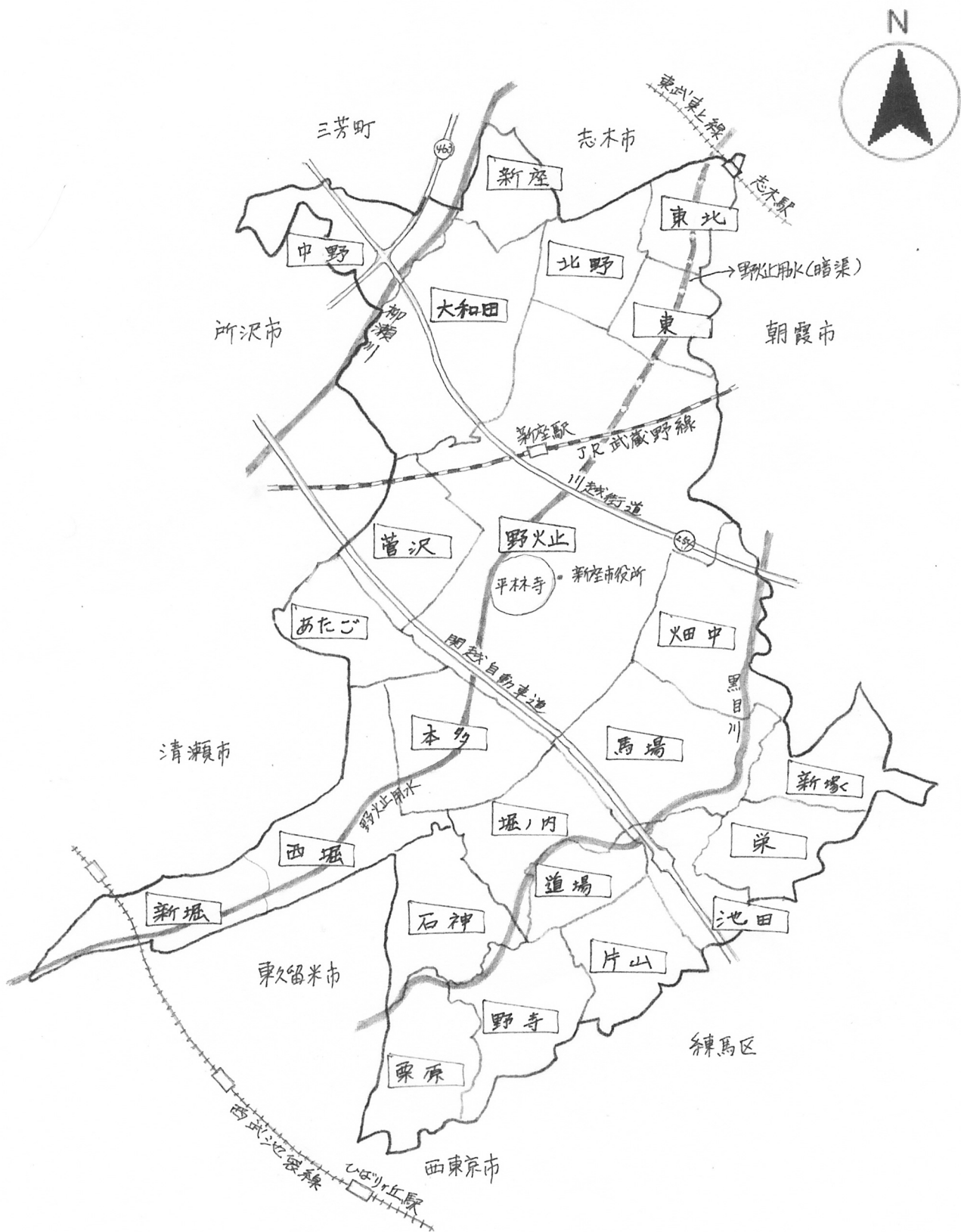
こうして、今までのことを振り返ってみると、私が多方面での活動ができたのは、自分ひとりの力ではなかったと改め

て気付かされます。夫の農業を懸命にやっっている姿を尊敬することができ、共にやっついていこうとの気持ちを持ったからだと思います。夫の支えと理解があつてのことですね。

(聞き取り 平成二三年八月)



新座市概略地図



あとがき

指導員 中村 初枝

新座市の前身である新座町は、昭和三〇（一九五五）年に、大和田町と片山村の合併で誕生しました。現在の人口は一六万人ですが、当時は一万一千人の農村地域でした。

市制施行した四五年は、日本全国が大きく変動した高度経済成長期でもあり、東京近郊にあつて最も多く影響を受けた地域でもありました。自然環境のみならず生活全般も激しく転換したのです。

戦中戦後の混乱のなかでの暮らしも、厳しいものでした。

話者の方たちは、この困難であつた生活の様子を、古い記憶をたどりながら、時には楽しそうに語ってくださいました。

人生の先輩たちの力強い姿をつづつたこの冊子は、私たちのみならず、次の世代をも勇気づけてくれるでしょう。

これからも、多くの女性のお話をお聞きし、女性の視点を加えた厚みのある歴史づくりへ寄与していきたいと思っております。

応援して下さった全ての方に、心よりお礼を申し上げます。

平成二五年三月

<女性史発掘講座 講師（敬称略）とテーマ>

石崎 昇子 宇野 勝子 折井 美耶子 海保 洋子 小沼 稜子
桜井 由幾 長島 淳子 永原 和子 服藤 早苗 山村 淑子

平成 21 年度 「曾祖母、祖母、母…そして私 ～幕末から現代までの女性のくらし」

平成 22 年度 「私たちの新座女性史 作り方入門講座」

平成 23 年度 「女性の昭和史 激動の昭和を生き抜いた女性たち」

平成 24 年度 「家族って結婚ってなんだろう ～イザナギ・イザナミの昔から」

<協力>

春日部市男女共同参画推進センター

清瀬市男女共同参画センター

練馬女性史を拓く会

八王子女性史サークル

府中市女性史編さん実行委員会

<参考資料>

新座市教育委員会市史編さん室『新座市史 第3巻 近代・現代資料編』

新座市教育委員会市史編さん室『新座市史 第4巻 民俗編』

新座市教育委員会市史編さん室『新座市史 第5巻 通史編』

新座市教育委員会市史編さん室『大和田の民俗』

新座市教育委員会市史編さん室『片山の民俗』

新座市教育委員会市史編さん室『新座の金石文』

新座市教育委員会市史編さん室『新座市の民家』

新座市役所総務部総務課『郷土の歩み』

新座市役所総務部総務課『新座市統計書』

埼玉県『さいたま女性の歩み 上巻』

埼玉県『さいたま女性の歩み 下巻』

総合女性史研究会『女性史と出会う』

総合女性史研究会『女性史総合年表』

<にいざ女性の歴史を知る会メンバー>

井上晶子 大矢道子 小林和子 中村初枝 本間真美 松村道子

< 編集を終えて >

女性史講座の受講を機に、編纂に携わることになったが、新座女性の歴史をたどる作業は、私にとって、まさに「温故知新」のプロセスでもあった。

現在、当たり前前に享受している様々な制度や権利に守られた暮らしは、新座の地に根を張った生活の中から、自分のなすべき道を見出した女性たちが、力を合わせ、情熱と、持てる力を注ぐことで、得られたのだと痛感した。今一度、彼女達の志と、実現に向けての活動に立ちかえり、その意義を深く噛み締めることで、この時代が抱える諸課題への対峙のしかたが、見えてくる思いがする。

今回掲載できなかった多くの活動も、今、記録を残さなければ、新たな新座を創り出す女性たちの、立ち位置が見えなくなるばかりか、羅針盤を失うとのあせりすら覚える。井上 晶子

「天の半分は女が支えている」と、国際婦人年に女たちは宣言しました。このたび、みなさんのお話を聞いて、私も宣言したくなりました。「新座の歴史の半分は女がつくってきた！」。

農家の女たちの、命を維持し次代につなげる日々の営み——家事・育児と農作業。人口急増期に転入してきた女たちの、「子どもたちに少しでも安全で快適な環境を」と駆けずり回った運動の日々。

歴史の底辺を支えた女たちのくらしを掘り起こし、記録する作業を、これからも続けたいと思っています。大矢 道子

新座に住みながら、地元のことを何も知らない自分に気がついた。そんなときの、ここに生まれ、育ち、生活し、活動する女性たちとの出会いは、とても有意義なものだった。

女性であるがゆえに思うに任せない時代の連続、であっただろうと想像されるが、彼女等のご自分の半生をととても生き活きと語ってくださった。自信に満ちたその姿はとても美しかった。

そんな先輩がたの軌跡を参考に、私たちも大いに輝いていきたいものだ。小林 和子

女性史の編纂に携わるなかで、多くの学びや気づきを得られた。話者の方がたは皆、女性が性的役割に縛られていた時代にあっても、一人ひとりがその方なりのやり方で生き方を謳歌されていた。男女平等を当たり前前に享受してきた私にとって、お話はとても新鮮で、かつ今後の生き方を考える契機となった。

また、女性はとりわけ地域の中で生きる要素が強いことを実感した。進学で上京し、埼玉都民だった私は、出産を機に退職後、初めてこの土地と正面から向き合った。聞き取りを通して、新たな故郷となるこの地に対して一層の関心と親しみを覚えたことも私には大きな収穫である。本間 真美

40年近く勤めた職場を退職し「何かやりたい」と思っていたとき目にしたのが、広報の「女性史発掘講座」でした。学生時代、ちょっとだけかじった「民衆史」との共通点があるのでは、と参加しました。

お聞きした話をひとつの文章にまとめるのは予想どおり大変な作業でしたが、先輩の女性の方々からお聞きした話はどれも魅力的でした。同時に「新座都民」から「新座市民」の仲間入りができただけかな、と思えてきました。できれば、これからも続けていきたいと思っています。

松村 道子



聞き書きでつづる 新座・女たちの歩み
平成25年3月30日発行

編集：にいざ女性の歴史を知る会

発行：新座市

連絡先：新座市男女共同参画推進プラザ

新座市東北2-36-11

